佳作

家族の大切さ

新潟県妙高市立新井中学校
２年　峯村　りよ

みなさんは、家族を大切にしていますか。家族がいるというありがたさに気付き、家族に感謝していますか。

私は、小学校５年生のとき、父を病気で失いました。突然の出来事で、初めは理解ができませんでした。ただ驚いて、悲しくて、茫然としていました。

父が亡くなってから、ふとしたときに「死ぬってどれほど怖いのだろう。」「死ぬ直前は……」「死んだ後は……」などとさまざまなことを考えてしまいました。それまで他人事のように捉えていたことが、突然身近に起こったことで、私は怖さでいっぱいになっていました。さらに、今度は母がどこかに行ってしまいそうな大きな不安に襲われ、夜も夢の中で母を探し、涙で目を覚ますことが続きました。

そんなとき、私の様子を心配した母が、私を抱きしめて「どこにも行かないよ。」と言ってくれました。その言葉に、私はどれほど安心したかわかりません。それから私の恐怖心は、次第に収まっていきました。

しかし、私には心残りがありました。父が入院してから、私は父と話をする時間が全くなかったのです。こんなにも早く父の病気が進行するとは思わず、そのうち話もできるだろうと思っていました。しかし、そうできないまま父は亡くなってしまいました。話をする時間をつくりだせばよかった……。それが私にとって大きな後悔でした。それから私は、家族との時間を一瞬一瞬大切にしようと思いました。

そうはいっても、中学生になって生活環境が変わり、疲れたり、イライラしたりすると、つい身近にいる家族にあたってしまうことがありました。気が付くと「うるさい。」「ちょっと黙ってて。」など、ひどいことを言ってしまう自分がいました。そんなとき、父の顔が浮かび、はっとします。もっと明るく家族と会話をしたい、自分の言葉や行動を考え直そうと思いました。私はそのために、「ありがとう」という言葉をたくさん使うように意識してみました。そうすることで、家族との関わりはずっと良いものになりました。そして、家族との会話をする時間が、楽しくなりました。

ある日、友達と歩きながら話をしているときに、友達が急に家族について話し始めました。「最近、親マジで嫌なんだよね。」「ほんとウザイ。」――私はそれを聞いて、とても切ない気持ちになりました。「そんなことないでしょ。」「〇

〇ちゃんのこと気になるんだよ。」と私なりに友達をなだめたつもりでした。けれども、友達は家族について悪く言うばかりで、さらにこう言いました。「死ねばいいのに。」――私は腹が立ちました。その友達が家族を大切にしていないと思えたからです。私はその友達に、家族と一緒の時間をもてるのは当たり前ではないことや、家族を失うことがどれだけつらく悲しいことなのかをわかってもらいたいと思いました。実際にはできませんでしたが、私が教えてあげられたらいいのに、とも思いました。

私が今までこんなに恵まれた生活を送ってこられたのは、家族みんなのおかげです。この世界には、私のように親が一人の人もいれば、育ててくれる人がいなくて施設に入って生活する人もいます。よく「子は親の背中を見て育つ」という言葉を聞きますが、世の中にはそうできない人もいます。でも私はできます。私は進学を希望していますが、中には経済的な理由で、断念しなければならない人もいます。でも私は進学という道を選ぶことができます。それは、親や家族が、私のために力を尽くしてくれているからです。私はそんな家族の背中を見て、自分もそういう大人になりたいと思うようになりました。

それだけではありません。私がわがままを言ったときは、我慢することを厳しく教えてくれました。また、時には優しく「いいよ。」と甘えさせてくれました。父を失ったことによる悲しみや恐怖を、安心で包んでくれたのも家族でした。このように、家族に感謝しなければならないことがたくさんあります。改めて今までの感謝を込めて、家族に恩返しをしていきたいと思います。

こんなにも感じることができた家族の大切さ。私はこれからも、そのありがたさを忘れずに頑張っていきます。